

繪入

山栴志吏

一

^ 13
3297
1



門 八 13  
3297  
1

序

余老友彛亭翁以點鐵成金之

才真能陶冶為物曾消暇日假

昌化碎妃之力而竟編次一部

之小說余閱之其事雖以無為

有以虛為實而其意即世間必

有之道理而自忠良之憂世豺

狼之亂國至男女相思之心曲

墨水魚入

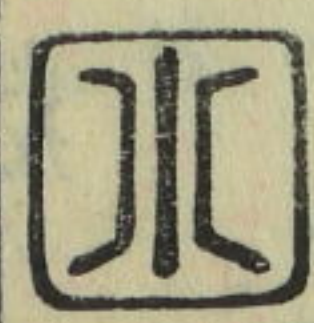
天正十年八月廿九  
本大學出版部氏

山科大夫卷之一

曾甫

各極其情狀如目擊也若此翁  
也可謂善盡人情矣余嘗聞古  
人好書夜寐尚讀小說其  
有何補乎以其盡人情而殆見  
起我也於是知古人之勤博洽  
有味哉古人之讀小說見輩翫  
之則亦可以長其智思也

墨水漁人



自序

此皆小說之書所以于世之  
以為兒女事之動或為  
年之能似種之種物與人  
之善古人功之去教之  
故今之君子其肆之而為本

於榮色嘗所獲之出增  
卷一法可所叶去為已本  
余不才習性庸且叶欠  
不特能然於人情世態  
固使以之也氣以描寫出  
美之肝膽與出以之情狀

而所著每之披名美如之  
手歷之錯誤又不知之  
隨不以呈情雅之說也  
所不取孤也特為兒女子孫  
宗動懲之之云尔  
文化已去其其五人



以天以地 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地  
 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地  
 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地  
 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地  
 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地 惟天惟地



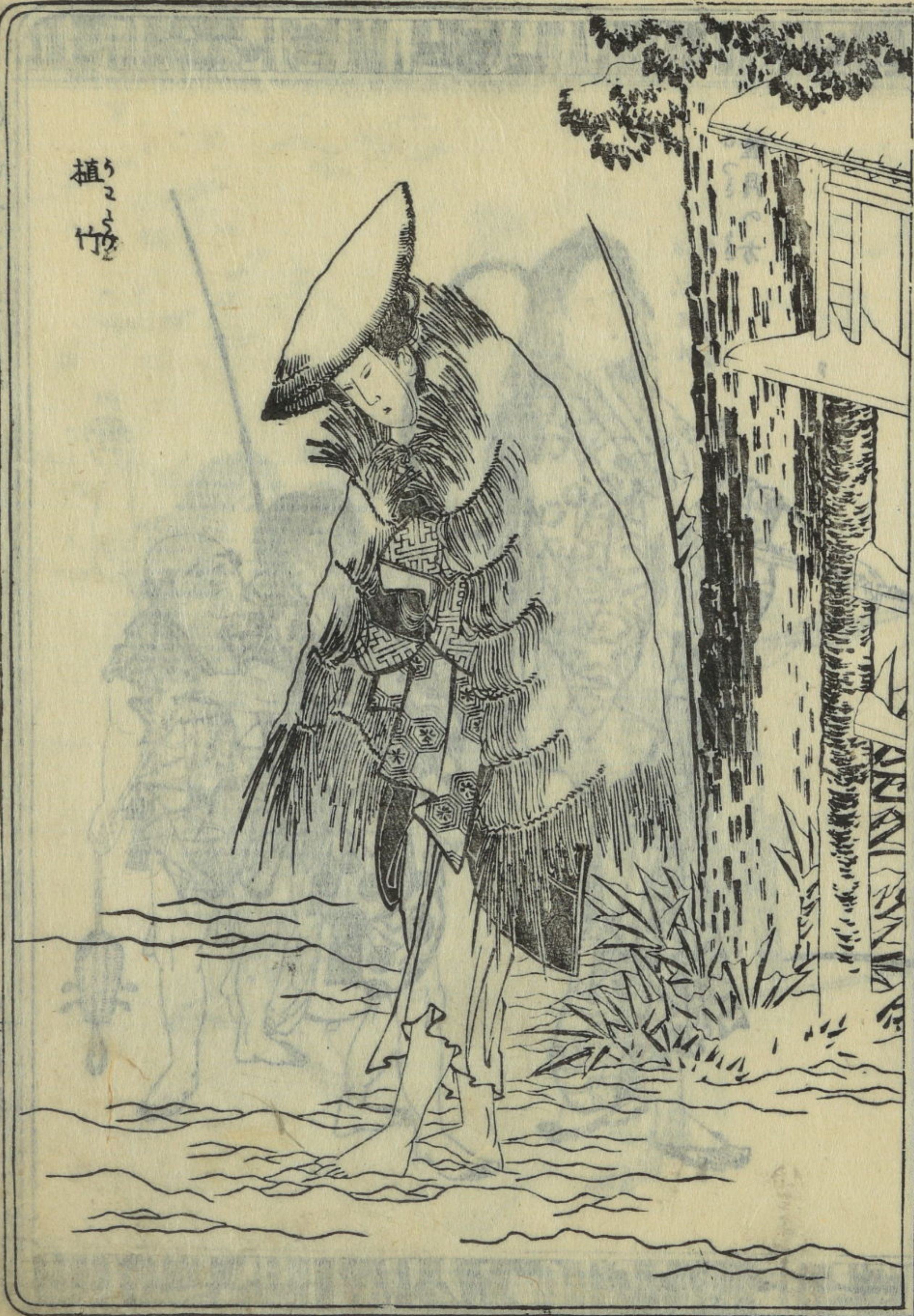
託馬郡司兵衛俊國  
つまごほしへいゑしむね

村岡玄蕃要道



大村外記尤衛門政景





植  
竹



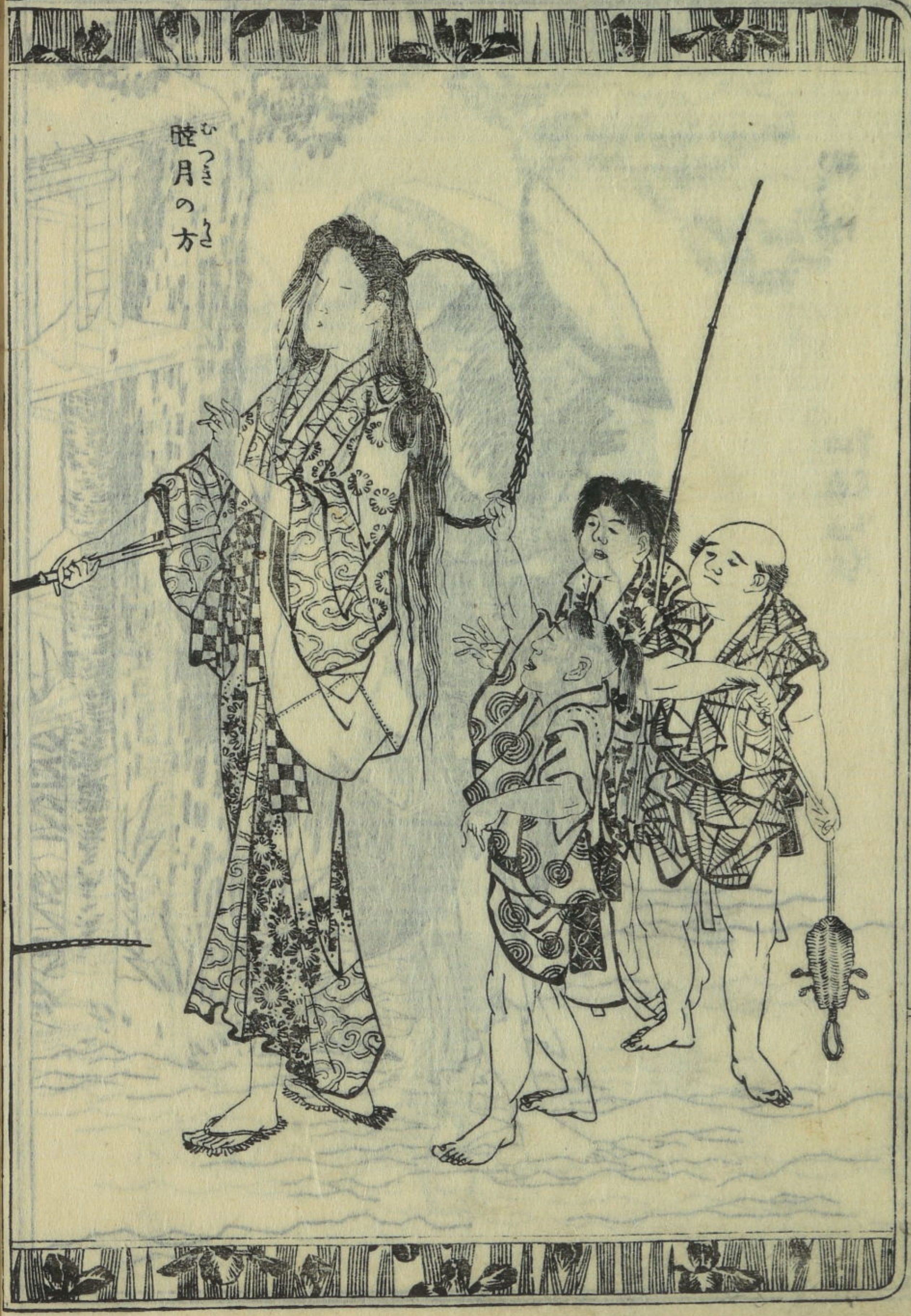
山  
角  
太  
夫

山  
角  
太  
夫

三  
年  
前



睦月の方





八百六十九



御無

八百六十九



託馬觀吾

御無



二  
山崎



安  
壽  
姬

山崎

八  
日

え  
山  
掛  
太  
夫



福  
立



山樵大夫榮枯物語

全部五冊

總目錄

壹之卷

第一

正氏磐木山小獵獸

第二

玄蕃正氏招別業

第三

西氏嫌諫迎梢館

貳之卷

第四

俊國見道奴婢通

第五

政景誤害女浅香

第六

梢頭白狐形別子

第七

玄蕃要道弑正氏

第八

宇和竹街而乞食

第九

觀吾吉野網蓆妓

第十

膽輔影豫行賓禮

參之卷

第十一

柵疎父避地窮居

第十二

安壽姬黃金贖身

四之卷

第十三

安壽姫死投神窟

第十四

睦月方因孝一姓

第十五

小櫻責觀吾夾約

第十六

橋立達頑子惡僧

山樵大夫榮枯物語

全部五冊

第十七

都志王怠薪印額

第十八

山五之卷

第十九

雄誹謗觀吾操死

第二十

觀吾暗父母怨恨

第二十一

金佛代都志王

第二十二

都志王再起

第二十三

通計二十有一司

第二十四

目錄終

第二十五

第二十六

第二十七

山榊太夫榮枯物語卷之一

山榊太夫榮枯物語卷之一

江東 梅暮里 谷我補編

第一

正氏岩城山小獸代捕ま

曰若人皇七十二代白河院の永保二壬戌年みあつて賊將藍津權太郎

廣行逆意を企むふよつて。茶の川勝の後胤岩木左衛門尉正房馳向ひ

終に廣行を討ちつけしむ。國靜謐となりけり。其恩賞正房に

の中津野郡岩城郡信夫郡を一圓み下し玉のちが故に正房の武徳遠近

に名を顯國おのぼくら隨ひ尚士に愛し万民の腹さるる。幼兒の母衣へ慕

が如く形しふ。そがれはも正房病ふよつて逝去かれは其子判官正氏天永

三壬辰の正月家督をうけ續國家よく治り。漫灌して天理小竹に黎民瘦

倦報辛の苦なり。五穀よく豊て腹報は太子をうとて安樂はけり。時

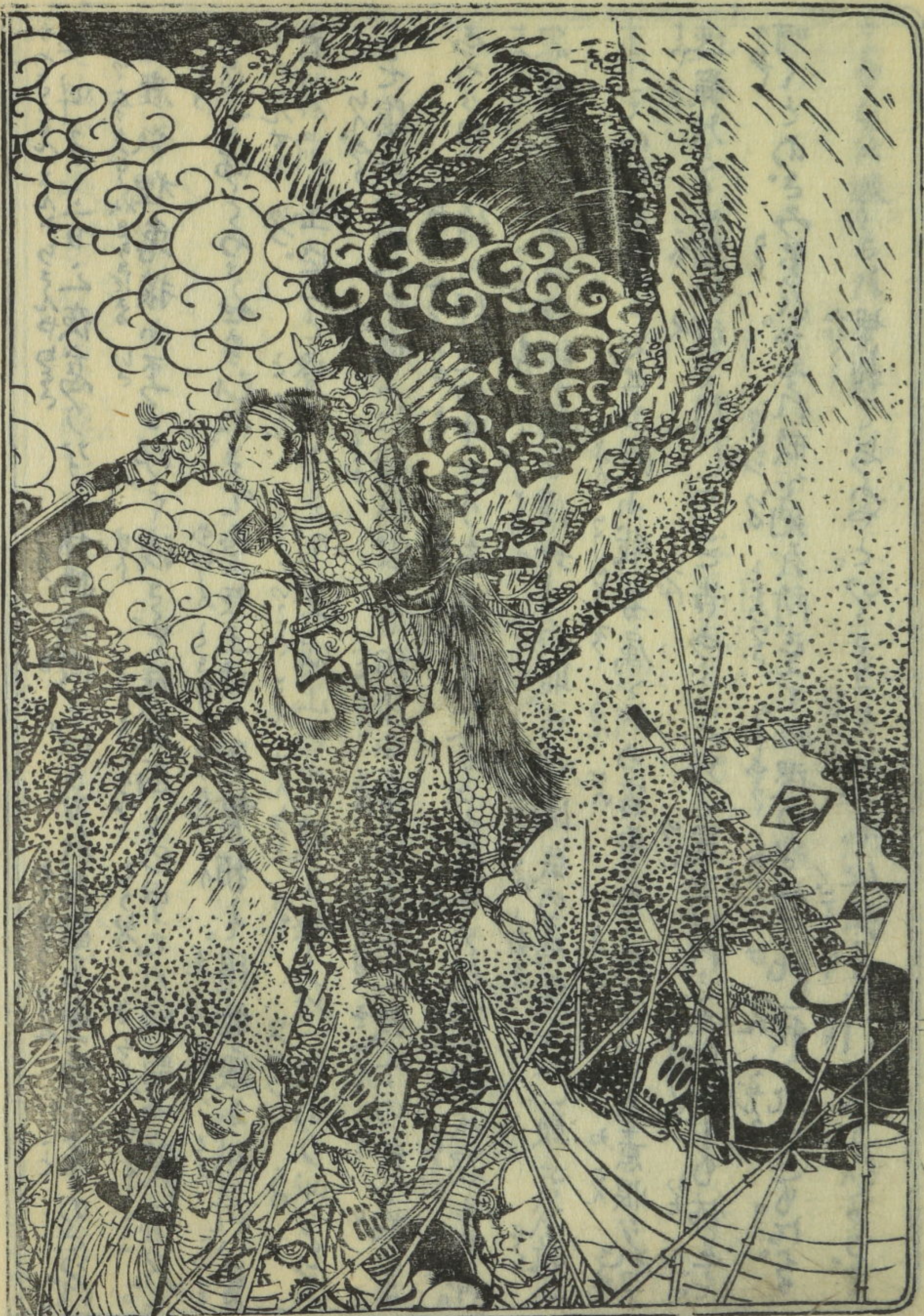
いづかたれ故もや。岩城山の麓へ猪鹿を、土田畑を荒さるるもた。黎  
民望防るるも段もこゝ免れ角りれ國事の威光あふは人の災を退る  
わさるる縁由と具ふ訟多きは正氏えり烈おあはし民の苦窮や捨  
かゝる自らの難や救ひ得るるに。旧臣等へ商議はしるるに各口を捕へ君  
の土馬ふハ及ふはしくと。おとすも。肯ひ多るる我父ハ甲曹ふ守  
屈し弓箭を忘るひ一命を劫り。粉骨を碎き寒暑飢渴の功を積國を領する  
に僥倖我國太平を享しむといふも。武道の励又ハ代々天の預け多るる四民彼  
等と俱ふ恩あられぬ。人主と敬るる事億説まらばされを勞を俱わき  
さんハあふいと。永文三乙未九月六尺の狐を除け強以下の者ハ捕ひ得物  
なすし。人数を配り。法令を下し。諸君一同相國を定め正氏の翌未明より館  
へ出岩城山の巔頂へ陣を取壯凡ハかりて臣下の甲乙と見あふさもいほく

喚叫す。三日之夜息あり。く採獵や做と。いうかれ悪獸も度あつ事わさる。  
猪鹿狐狸兔猿ふまら。ほぐ洩さ。採獵面々の甲乙ハ飯館ハ賞する。  
士卒とほらあせむひね。さて愛臣土岐九郎繁頼も。得物衆ハ越されハ勇  
荐。君前へ土匠と登山する。時岩城山の半腹ハ怪し一穴あり。此ららふ  
こそ陰獸のかくれ忍ぶに疑ひなし。組下ハ命じて穴中へ数千の矢を射こま  
あやぐれハ一徐の煙穴の中より立騰と入る。白髪され翁縮み。拐肩押  
忽然と起し。九郎繁頼を撲地と白眼正氏國民の爲獵をば。艱苦ハ救ふ  
事その理ありと。しども漫ハ我券属と何の害ありて。獵するも。意眼ハ早  
速獵や。め館に飯アけしめよと告あ。と。罵アけれ。九郎少ハ怖し。と。  
呵く。と。のぞみ多し。すをれ。取を納所。して社禊の守神と化。我を訛とも。ほら  
ア。の。り。知。ふ。され。繁頼と。あや。と。し。く。ま。矢。差。ぐ。や。に。強。弓。と。引。ち。あ。り。ひ。よ。う。ぞ。



七十七卷

部



七十八卷

十三  
部

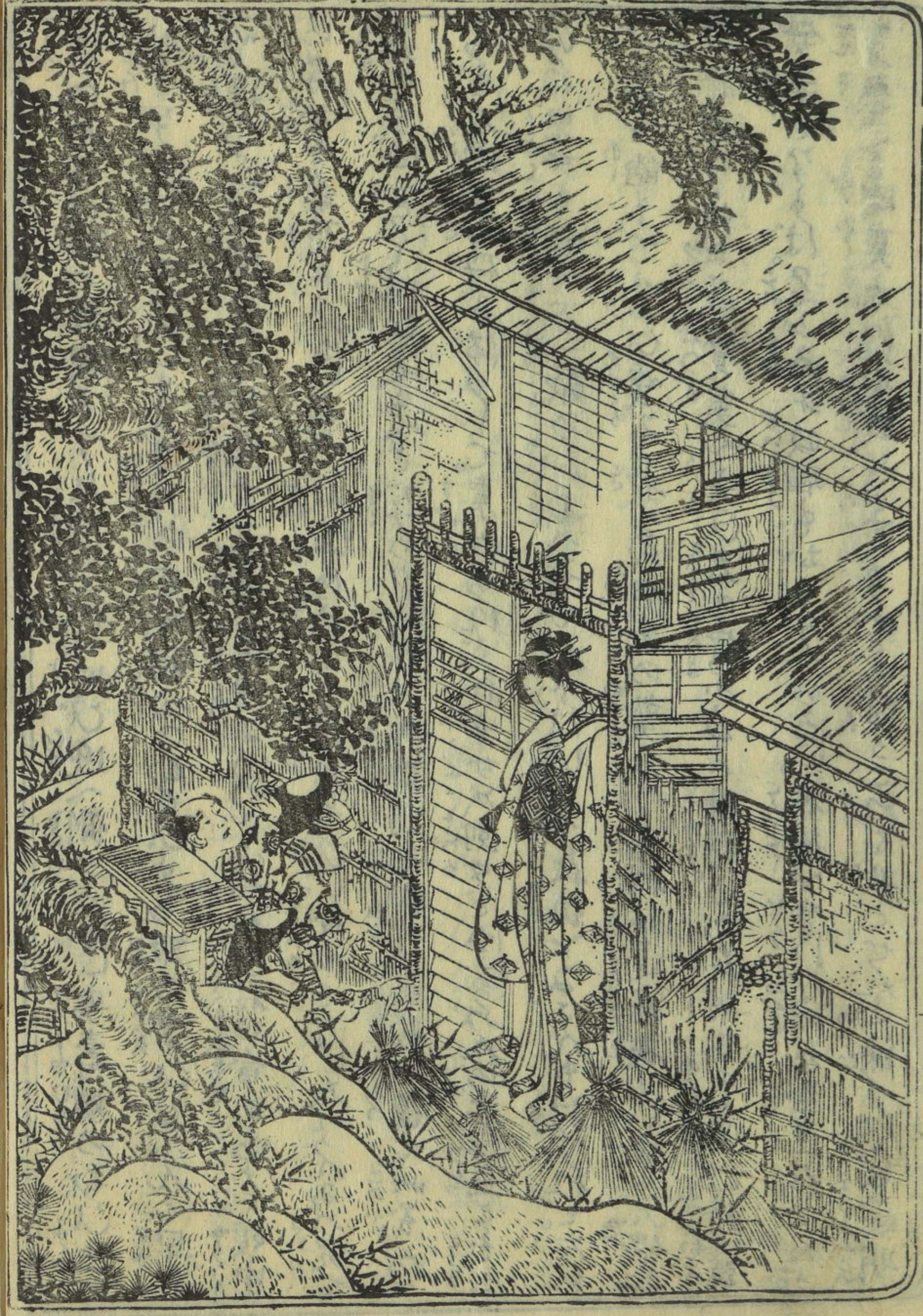
射す放せの豪氣の弓勢におそれ逃去んとなす耐尾筒の中ア尾の根より  
 両目裂衣白狐の顔をわづし何地ともなく飛去ぬ九郎繁頼の多食下卒  
 又集れ山の巔小至り正氏へ縁由と細く誥あげられ正氏しづしくも  
 ともや飯館をらなげし幽薄と乱るん麓として下りぬお落日西雲の彩も  
 人路の難行は道よりゆへ宿雨樹林を放とて頭小零荊蕪生茂  
 露裾を濡し適く風が運れ遠寺の鐘夜添ふはれもいと寂莫に  
 級入をかりにちひる折微ふ樹影千重とまれぬ燈火の板こそ人家に近道と  
 松明をてしとたれたれふ爰は一つの菴室ともおぼしめ芽舎ありていと妙なる声  
 ちと阿弥陀仏の由名と唱へ而親非業に先く罪障消滅頓證菩提と詠打あじ  
 阿弥陀仏くと昌ゆれ者ありこの妙音とせりの一とびに耳とそぐと二度とけけ  
 かへん心は盪と正氏鬱悒這遍山中に離婦の声あく念佛を唱つことそ

はねぬぬ何うはあも詠のあふり尋問をたてて従者に命じて離外ふらむは  
 庵主板戸をたれとえれ小果して二八ごうに離婦なり粧し声してしれを  
 夜陰小門へおとるひうあ何人おとせれやとれは向方に駭發儀衛と連ふ  
 と國守の獵ふ出りひ夜陰ふおひ踏ふまよひうあふらふと云つ庭の切戸  
 次明と招くぬ正氏の家生等その容貌の英麗又てかれ絶世の美人も有る  
 その母と疑惑おとる懸想のう海へかしてぞろと身の毛いよならいぶかりま  
 りこれハ我々命にうり身身の人又同ん音なきしおりこれハ列人もま  
 少女の身少てかれ涼山は寓居はうらいう成人おて世をくは涙をさるは  
 作しくと責ければ何事やとをを勞しゆれにうらうが身の原因はあま  
 に羞しひさ氏もなく孝も性も残しぬりのなれが桑梓非命に死なれは今  
 親し人もなく涼山は跡を朽木家の一夜の嵐をさう怖がれ身がれを



市中にありて人々逢ふもさげふりて。父母の菩提を吊りんたふ死をさめおし  
 げたる黒髪もさる聖の訪ひ多きを年月待甲斐なき避地をさめおし  
 と漆衣の尼法師朝な夕なに阿弥陀仏を唱へ孝養の心こそはしつれどや  
 我とぞしえ人あはば泣くをさへりもさる時流瀬の舟へおし。餘所の説き屈  
 ちあふれぬ。ゆるさせ多くと切戸建より菴へ入るとかえりてや。いなや足をや  
 ぬり。正氏にありの候も上げれば便かたりにおとされ公を残り飯館を  
 ぬり。叔正氏も室睦月の方と初として重臣等口を揃へ勞を同じひ恙な  
 と祝しければ何うと置正氏もあか鴨も食とて死なれぬとて  
 も樹林重多れが礼もいさざれ蕭々たる深山よ一つの庵室ありていと濃うに  
 念佛を唱ふのいさしくさふか故に従者として同じに一位の孝女の首尾審  
 治。季六が妻の姑母仕へにもおとく劣ればはは孝婦なり。領中あか

者のありけり。規模とすれ所なれば呼び迎へ側女とほ安壽姫のおひまの  
 助とさめ。と云ふじも睦月の方も相公のおひまら。姫の幸ひりんと早く  
 呼迎へしを願ふ人の村岡玄蕃要道傍ありてこれハ君の命のあはれ領中  
 の孝女を余所みえはしあり。政事の大なる落度あり。側女となしたる人の究て  
 益あり。とく呼ひえ多くと存りられ純馬郡司共樹俊國頭を振て此もあ  
 らも大國の百辟もほりて。素性あれがれ見女側女とはさる人のさしとを  
 びね見女と侮り万一敵のたれおあもあはば。いづれ仇とさる人も討られ。た  
 なくとも飽きて喰ひ暖不著る咽えの熱がこれ。仏道漆衣もかゝる破と  
 倚慢のらね。身實氣を失ひ君の宣ふもの推辞さるれ時と電機情又設  
 母妻とさるは。足がぬ政職もおとりのゆえ。孝徳と賞し。あは垂とさるわ  
 穿鑿と逐莫太に米銭をさへも誰うこれを非とせんと疎かに固總明



伶俐の折あてよく臣下の諫めが納め多む。不貞氣あつて入けるが先づみり止りぬ  
 折一陣の冷風正氏の身に流ると見えへむしより意地例さるる医師を召て見せ  
 め。靈丹が用ひ医療をせしむ人も験もつくと付してさるるひらくとして罪を免  
 ら打却も出合者と申討とほしく始り砕の醒されおとく寐殿へ引籠り別  
 人手對結と忌嫌ひ替くと樂みみむる日又重祿月が預るにあさぐの斯もれ中  
 度くなり。又赤奮若満れ頃より寢殿鳴動しく種ぐの怪有とあつた。或ひハ  
 木石が砾も投こと頻りに。大雨車軸が流そかとすれぬ忽雲暗き月尖く日昼  
 光敷き空中に一鳥のつら雲が飛くと見えし。雲中に声ありていしく。

要存其政行

道亡其命止

此句の語一は家長父おらん用ひじて却て諷する時ハ天災降るも避る  
 るめこのごとくし終りて晴るる事三日に及び正氏もくつめをしづしやせ

おのひけれども。要道の二字よりて家の安危を示せ。玄蕃一個にして政とはを  
 ばれば家安れ。いとと惑ひ公申候一あのみ發しむる時土岐九郎繁頼正氏の  
 前へ執りしつれハ臣君の傍ありてさるるの奇怪を聞かると君頃日病ひ  
 犯され清公がうら其甚虚おぼして悉伽羅の類ひ禁あむりのおろり。世も病と病と  
 病一もふみなわれと憚れ色なく述べれ。尋常に似氣なく面色火のぶといふ。  
 のや一とにくがまゆゆい色をばせ。計て絶せ七才智に侍不礼なりと抜討お  
 切はけさるる。少もむれもと籍にさかり。泪連如とあばし。玄蕃要道の。當家子  
 由緒のれども正しく敵の侮敷なり。彼一個が政が任せられが跋扈なし。かまへるる  
 亡ぶるに至らん。臣が身ハ侍討ふがれと露むかりも惜と好く。唯恨なくへ玄蕃  
 要道逆意が殺せられと見え。俱小が家へまを替らんものと齒を齒眼を印し  
 自短刀を咽えへごとと突まその氣息殺死しりけれ。夕の寝安と浦山とわら

も一刃の錆とひかりぬ。嗚呼憐れし忠臣惜しむる勇士なれ。それにて是れ愛母又  
 持津の國小濱の岬に上遠太兵六とくられ者なり。往昔岩木判官正氏の重村村岡  
 玄蕃要道の信臣ありし。要道が事道なれと數々。くぐりの別言して信也とも用  
 ざれふらうと身が退け。本國の縁とりて此とて後母養居りせとも。世渡るべし業小  
 疎く固射とと百發百中の妙掌のれど。獵人となりてましく夫婦しとなみたる中。  
 支個の間小男子とりわけが。尋常の赤子に異なりて。齒生る後ひ丸の胎目より  
 わりて骨太く逞し。性兒なれば再び家と記さる者なり。と公小喜ひ。三郎と号。  
 貧乏中おも蝶よ花よと養育められ。こつ子四つ子のと後母似げおく。不直はして  
 吐りぬとさうへ悪智ににして。人の賤室と盛して。ひそかに母へ流しられ。しが  
 より取身とるとと官づれば。又制しもせど。却く賢れを賞し。代はして。滋味物  
 ばふゆるも些遅ければ。傾足して。勉強と。それのへさられ。多ひとは。好められ。

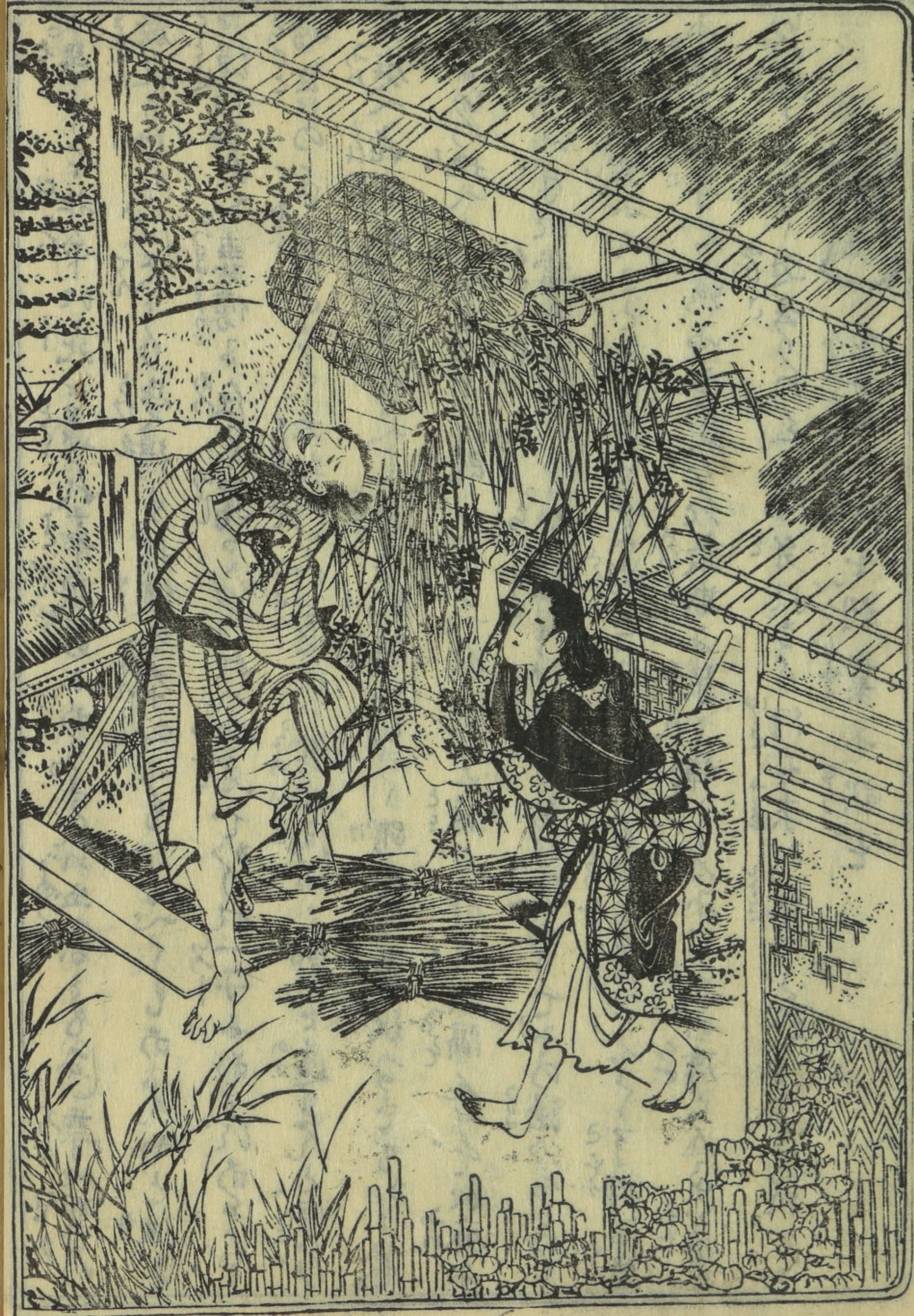
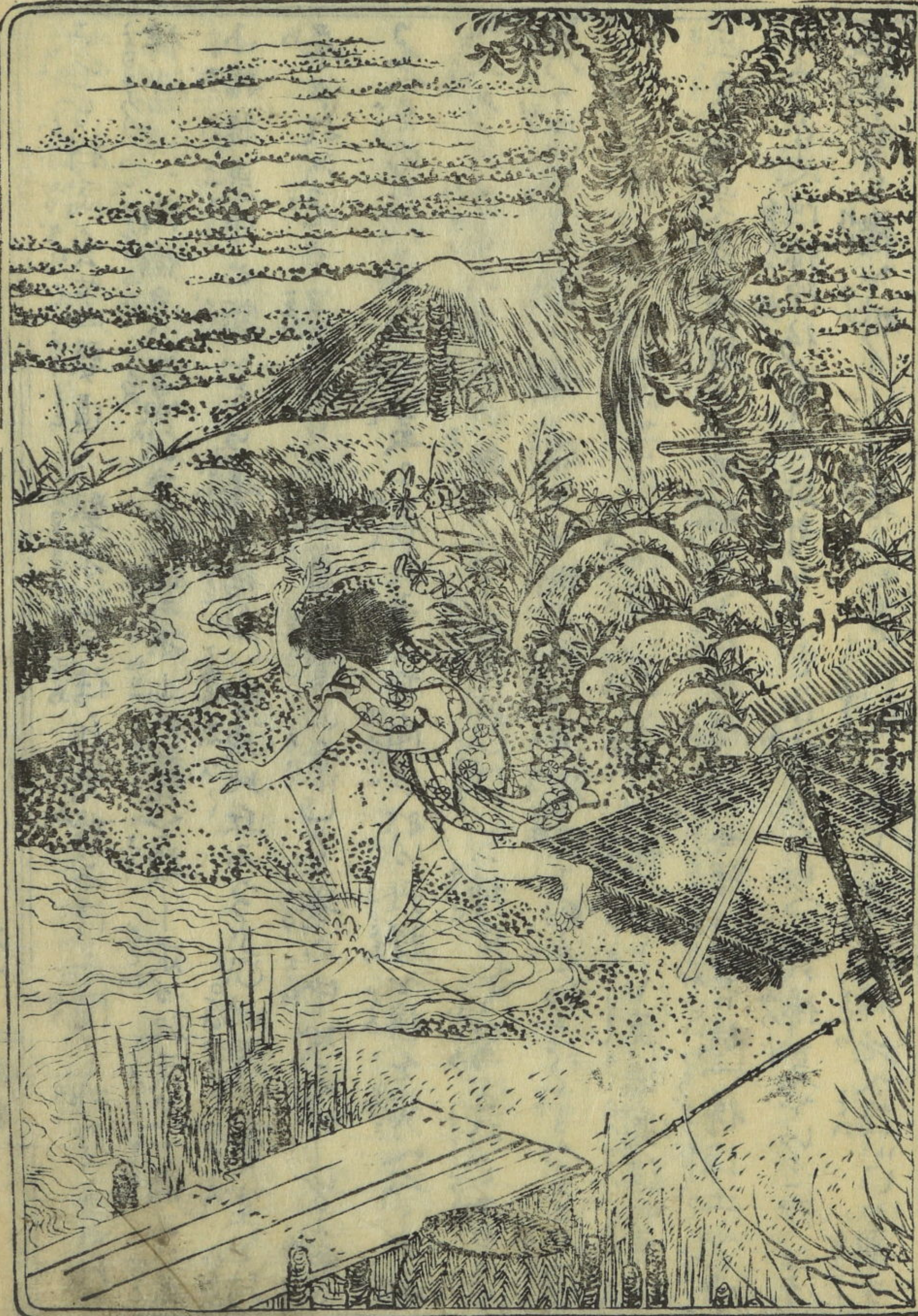
飽やとあさへわれをいふ。此る慕て。父太兵六を子の生らられよ。かんと。悲しき  
 教訓がせも用むべし。もえへされ。も。あじも。え。題か。れ。を。憑。こ。只。と。後。の。直。る。し。  
 めむり。死。さ。とも。悔。か。か。んと。朝暮宿願。他。なく。父。の。斯。り。て。勞。を。其。の。厚。れ。不。母。丸。と。  
 おして。愛。憐。の。と。ゆ。く。我。子。の。か。せ。非。も。利。と。遊。且。夫。を。兵。六。は。よく。割。さ。れ。り。あ。れ。て。  
 え。ひ。不。怒。り。子。と。俱。む。て。い。ひ。る。と。い。ふ。に。誹。謗。は。ね。を。兵。六。も。な。ら。ず。悪。め。も。身。  
 恩。愛。より。お。こ。り。し。不。れ。と。ら。後。不。納。め。れ。とも。三。郎。の。行。未。の。い。を。あ。る。へ。と。安。か。ら。  
 ぞ。お。ろ。ひ。暮。し。ぬ。三。郎。七。女。の。秋。一。日。保。長。の。り。と。に。租。税。納。め。る。り。あり。て。其。令。  
 駁。あ。り。取。集。め。會。計。め。れ。お。今。日。で。何。り。々。れ。萬。金。一。圓。又。一。と。同。遠。み。り。や。  
 と。會。計。は。か。な。入。る。と。い。ふ。く。不。足。せ。り。去。れ。ば。逆。傍。は。在。る。者。に。知。こ。三。郎。  
 の。こ。外。不。疑。ふ。と。た。人。も。お。く。と。し。く。何。こ。後。う。か。取。隠。し。も。せ。り。や。也。さ。は。  
 ぐ。同。ひ。尋。ね。れ。ど。い。う。も。あ。ら。は。れ。光。景。め。と。三。郎。自。丸。裸。と。なり。毛。袋。が。

好むひえせ。疑ひが晴し。天心の阿古がうさかひ。我が罪なり。かきて  
 親くへ沙汰じせさと添く蓋らい。今ハせんぞなれば黄金とは保長が  
 子より傍ひ納めぬ。三郎の優くと我家不飯で内を認さるん父大兵六  
 又へこれへひそくに母をすねさ。しづと母匿しおらん黄金一糸をえ出母へ渡し  
 かくのぬえ物を貫ひ身じなり。滋味食物と。しづめごとく圓頼ぬ。うと父  
 大兵六をうまの日の日猫のおししかねぬ悔ひ夕飯とあさめ又出んと半はて  
 飯でかてゆらり船。内の変状とる涙をこぼし。近く一子に燃られ。かた  
 子母ら後を苦しいとつれも人並かたぬ業とせを報ひもやと生質  
 老實する者なれば。頼小公が責めが走り入る。三郎が髻をうり  
 居携へる弓をりてあさか母折檻は。かされり地より黄金と盗  
 孩兒のぬとして何れ做さるの悪ど流しや。嗚呼前生の因縁も有ん

が果しと非命に死に遂れ奉眼ああり。それの出家もは尊と聖乃  
 教化うけなば天より受得られ儘の本公もなるべくもあらんやと泣  
 口説りしれと妻傍に在り罵りしれ。ゆえにかりれ一子母あふ。あさ  
 擲筆ののち荒とさる。大兵六を引退れば其非問ふ三郎と道と人と賢け  
 母庭へ下ね父をさへし妻の肥腹をいり踏わけ。氣殺るもかた  
 やより地へ逃さへこと既めさへんとなすと耐。三郎身以隔ん母に庭  
 ありあふ手に當れ物とし。父へ打けけられらに録ありて。その漢ゆらり好く  
 大兵六が咽ふごととまのけさほは倒し死ね。三郎も此光景とるく了得も悪  
 小深るれ子ご流しぬ。ぬかぬ最期も呆し挿く身不火の庫らん。母と怖  
 り地も形。逃さるぬ。三郎が身れうり行を未だ説りしれとえとあれ。

第二

玄蕃正氏を別業お招と



うても村岡玄乎要道、警木山に住れ庵婦おほく深く巧めるやあれが  
 伴當一兩個見し忍びやうに能く木山の麓を捜し求むに天竺陽山の藤  
 小指提惠中と額をうら。庵を結び妙恵比丘ふるふ此麓は菴室を結  
 居たれやえと是なりと玄蕃従者に命じく庵の中へ入せしむる菴を  
 えと。わりのれまに玄蕃は告げれよとや向方なる丹梯を搦を携へる庵  
 へ入れ見女の容貌の艶なれよとひやせし小増正しを驚と巧こ工めれも  
 りつう忘却は菴の縁へ腰うち掛こやのや庵主とやといはけりつうと入清  
 に菴主梢も又面ふ回答のこ仏檀へ花を捧げ懺悔く萬徳圓滿如未庵  
 三摩迦曼多羅解とこの明文と度唱へ父母煩澄菩提一佛浄土お至  
 あめと入阿弥陀仏くと証打たるとる終つくりしれ佛変しといひ  
 他事なく禮を破りし免をせ入何連るく這遍僻地へ訪じし國守

の重臣るんりの前も國守探獵し出多ひ當下従者とりつうのやの上  
 及び尋絲再びの足の労しめれ何ぞ責多ふ事のありてやとてと  
 物かりひくは西施が権もかやと遠く餘所の國も推量られ懸想  
 するつらさなりしれ。在下此處へ訪しれ佛の孝徳を聽慕ひし  
 じしなり。公が勞をえりるるれ。初めも同されと仏へ花を捧るの尋たふ  
 かり。何れ切られいいう成沢やのれ梢笑ひ合ふと殊勝も信するのふ。  
 めれの後妃般若者得達ありて踊躍の余り頭小咲一英とてわら折るひ  
 つ。おまのゆきに指け一仏浄土の引接たぐまのなむと堅く結縁は  
 礼拜なまこそ仏は花を捧るけりやと今も花とさげれ此明文を唱と  
 は忽諸天加護の功得ありて一佛浄土の臺ふらるる疑ひはとあり故  
 父母の為此を唱ゆるなりと流水の高さより早れ下とれと述る

役世の美人のこぼるる弁舌又夾に玄蕃尚出神をゆけし内方僻地小屈  
せざとも我妻となりて心のまに借物成捧けながく吊る足ふ上こそまの  
あふめ肯んやと責られハ梢権く回答せりし良ありてしれハ秋の野  
まらめりて女郎花あまほしほれ花も一時と断るるのこら世の光糸よ  
を常迅速に観ドえれば仮の世小迷ふこそ愚るるめ一生盟と男子と  
えと念佛数唱の功徳よすろ。父母と俱未と浄土の臺ふしとん  
成願されハ松風の籟とに耳も驚うる。雨の前れ連狙の叫ぶも寂莫  
の情もおこる。濃陰多たれば明もあはけ夏夜えううとるまう。  
苔徑踏りけ行と氣と多折細滴水小洗ひ清め佛へさけ。そのつと  
念佛と唱るの外なく。顔牆も訪ふ人なくと公もまう。想ふ身ハ阿那  
怱憤穢しやと耳ハ拂ひ紋門のうらへりねり得の無骨と玄蕃と

衝魂入手持り。飯宅なりても鬼角思想しやほし。今を公とる。世を余  
情もそま。忍び中ハ枕のえへ訪ひ。鬼迹かうの責るといふも多め。曲  
答もせと。阿弥陀佛の六字げめ。節濃中ハ唱られ。玄蕃と唯勝。然  
るに。ぐ赤心をあつとといふも。毫釐も絶ごおりの満ちハ百とい  
恨えん人の花といはしてん。よりハ我と爲を察せとんハ一カの下に命ハ  
以積怨を暗さんと怒氣を表し。られハ梢冷眼ふんそり。これハ固此世  
みずめ。あはれみかれ。あはれ。い。後置形く。あはれ。母殺害仕まふも。何とこれ  
ハ恨とせんと。交定の形勢。玄蕃傍お直くと。よりハ心覺の白刃と上段ハ  
振わげ。とや公ハ随ハ。がれ。を。知。つ。と。殺。さん。と。す。れ。ハ。総。身。麻。痺。自。由。成。  
ぞ。い。が。け。し。く。あ。ひ。お。う。ら。足。全。く。我。無。く。の。情。深。と。い。ま。お。く。と。し。物。と。再。び  
切んとすれば始ふ。か。ら。ん。び。振。う。か。く。向。り。け。れ。の。よ。ほ。く。ハ。佛。心。得。達。の。功。



かによれるやと迷念生じくは尚ほ痿痺と兩腕血脈は心の主と  
と故と白刃嘯と投擲空しく眼が瞋りけられ梢の合掌はしるつれ  
振て何ゆふふけりて殺害はむりや。惣忠の公小牽と切はぶれ勇  
士のらあふふいふ。あごみ笑ひ。禪書無門開ぬ日無繩自縛といふ  
あり。是守行のう用ゆべと教言かれと自こり責行るれ道理一なり。  
心身ふりて殺さん心使侍まなえ麻と切と能つと。仏果を得る  
りやと生疑白刃と放れ。是疑ひの繩をりて公成行るなり。心勇氣  
あれど智浅く色欲弱しやと。胸ふえれりありと雖成就はがく。  
妄母惣想とぼりの信ひりのはば。公願満足とてし。玄蕃と的當の一  
言ふ且悔且感と色欲盛なれ心も忽拭つれぶとにわさく。これと失  
し。償ひぬえの教あり。そん。我年々の望と失り。我の氏神

祖先の叱言とも思ひけり。此より我別業に付し念すに佛事。管  
み飽きて供とれをりて。徒草と始ふ誓りいと切うり。は。柄も推辞と肯  
ぐひ玄蕃と迎と特別業に移マタれ。諸この玄蕃要道と平親王將門の從  
弟村岡次郎兵衛忠要の昆裔千葉信田をけ門紫なり。先年藍都権太郎  
廣行小屬。父村岡兵衛要方小松の味落去の和武勇れとのゆと。磐木  
左衛門尉正道ぬく惜と臣と。厚く愛。妹花園姫をりて。子息玄蕃  
要道小取也。正氏家督はしても。玄蕃が勇に慢とれをありて。良もこれ人  
と睥睨。廣言と吐。と。流善くば。若者ゆえ由緒あれども。政の忍小加へられ。頃日  
の怪。元吉ふり。玄蕃一個も。政事。及。自と奇怪。遠ざく。いよ  
く。つ。怪。梁冀に増とれ。跋扈と刺らね者なり。又正氏を愛臣土岐  
九郎と。元吉も。り。に。討。は。は。後悔。は。寢殿へ入。と。

去々傍小存り。我の業に替は散一ふと潜招請は山海の珠味奇  
物頃日始やわれ社女と弄りや或ひは琵琶法師と弾せしめ残る所かう食  
齋たれ正氏真の催一酒酣ふ及び幽なれ隔の座あふ音曲の透より  
風がりてあふすれ証の香と俱みいと艶れた念仏の声泄とへられ正氏  
耳と傾けしりれ前お磐木山の麓なれ榎材の中に聴し念仏の音声ふ  
髪髻と袖忘なくゆきゆきと去々あふおありひ合はるゆりてや此光景とる  
より正氏が傍へ進み寄いつにも君の言みたがると磐木山の深山中け菴主  
梢としりれ者なり。君あへ出酒席の真由備んとて呼び出され鼻白く  
遙向方に坐し。誦候教ふ事なるとの其又杖拂の差足形なれとへ  
梅の空香を憂ひ楊柳の空香流るを羞る梢の容貌眉月連娟  
まぐ。蟬鬢靚とみ酒一芙蓉の畔丹花の唇銀牙の玉と含じゆや赤白

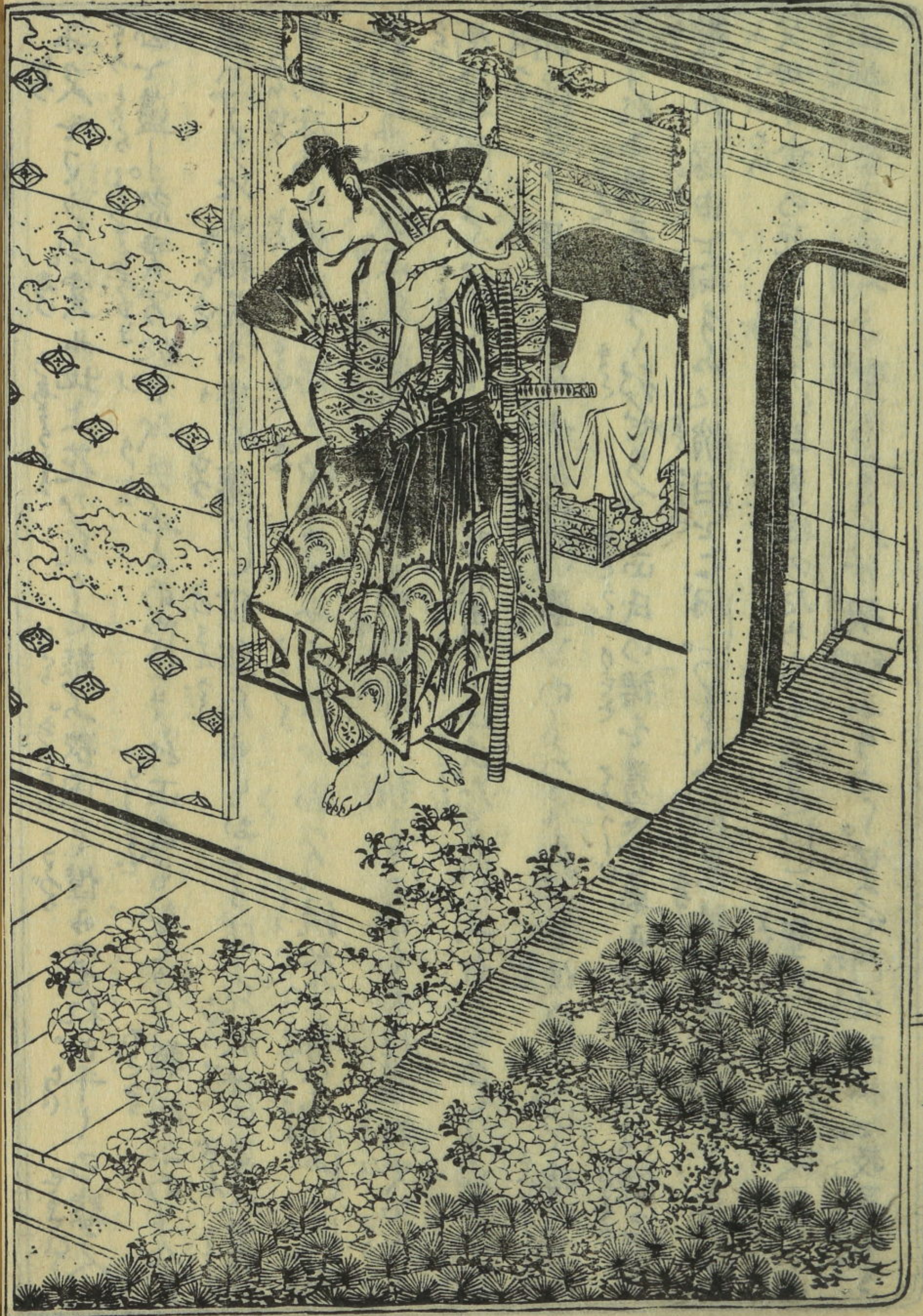
ふえとこら。実お地上花なれと疑ふ教因る僅かこれ千くの姿人れ  
心と盡し。忽雲方に日次失つとあやしめれ正氏もむごうり鮮明おのんとの  
どいりれ。梅花の香を譲りし彼銀后ももおとるほり世の美人お孝心  
も尚床を側近く振と酔ととせ玉筆なまりの流筆真の傳し酒席  
教別お暨び正氏廁へ行りんと動靜を梢をて中も悟る。灯火と先立  
廁へ接し。くま水とほいせれ當下正氏たれりれ。あつとひは合  
流流とく還るばれ水お托び盛とあつとこれこそ便はと。捨りる  
となくお梢をくく結せると正氏の裙を羞容氣おひえられは流石  
驚れ縁由と問ふに梢泪とこほ。ワハハ因果結お耳お汚しゆられは  
父母非命の死に遂しゆ急菩提のたれもつとじと塵外訪ふべれ人もか  
山林へ籠り。央べと聖もなれハ胡祝あうと。せりて阿弥陀仏と教篇唱る

山崎大天竺

七二 一 香



丹紅  
又長  
多因  
乃此  
可也



功徳ふより。父母威徳なほしめん。信公まことに癡堅丸。くろくから。自と修行  
山後。麻の啼音猿の啼る。おど淋。れた中の友とおほえ堂。し。君いつを。徒  
者をし。妻が。身の人。尋あふを。国守。か。れ。り。を。ま。し。兼。く。憐。愍。厚。さ  
次。笑。は。れ。べ。い。と。床。しく。述。は。慕。ひ。暗。中。を。な。る。に。威。の。つ。く。猛。ぐ。ら。ば。れ。と。人  
主の大河。ふ。ま。水。の。一。筋。流。る。か。お。世。に。の。り。が。た。れ。た。方。と。偶。慕。ひ。獨。る。く。う。り。は  
堰。留。が。た。れ。も。よ。し。は。し。る。と。忘。れ。え。と。忽。然。な。く。も。阿。弥。陀。仏。と。唱。悪。念。と。捨。ん  
と。す。れ。ど。煩。悩。の。進。去。か。く。は。あ。の。吐。と。空。しく。血。涙。珠。教。の。く。ま。く。に。鉦。の。當  
所。も。定。う。お。ら。れ。残。女。あ。も。雨。な。け。と。は。羞。へ。た。と。華。納。は。公。お。溢。れ。と。も。も。と  
て。か。く。浅。猿。と。ん。め。は。う。り。ほ。れ。ぞ。と。泣。く。恨。う。ら。み。て。は。泣。則。箇。元。の。善。心。お  
か。く。び。も。優。曇。花。の。盲。亀。の。浮。木。お。空。を。る。幸。も。あ。ら。ば。露。ぐ。かり。も。君。よ  
慕。ふ。の。厚。と。あ。ら。せ。は。り。く。せ。く。と。い。し。も。と。や。今。日。の。日。に。り。足。り。ぬ。と。懐。中

より。隠し持。と。れ。短。刀。抜。放。し。自殺。せ。ん。と。は。ける。正。氏。周。章。梢。く。右。の。脇。と  
お。く。や。よ。幟。誤。こ。と。な。か。ど。と。制。せ。い。も。考。て。肯。か。ぐ。も。う。り。て。い。く。れ。と。我。想。お  
る。甲。の。マ。ウ。ら。な。た。れ。と。暨。た。れ。を。願。と。た。れ。の。不。順。な。れ。ば。身。を。納。る。と。と。後。好。く。  
存。命。を。づ。し。り。ぬ。ら。け。より。死。て。芝。泉。の。父。母。へ。不。孝。の。罪。を。贖。ん。て。か。ら。殺。さ  
せ。め。と。う。争。ふ。と。う。ら。白。石。の。り。け。り。宥。め。ね。泣。泣。白。雨。の。如。く。半。の。晴。れ。必。ひ。と  
ま。し。君。妻。が。と。ろ。ろ。血。と。一。夜。の。情。お。百。重。と。保。て。よ。と。の。り。お。う。ん。う。何。連。う。の  
と。れ。を。喜。び。ん。却。て。佞。果。を。得。れ。使。も。断。れ。が。六。日。の。昌。痛。草。身。を。よ。ま。る  
も。盡。なん。ま。げ。の。情。の。何。う。せ。ん。と。胎。胎。然。と。正。氏。の。梢。が。切。か。る。に。と。や。こ。ろ  
く。死。て。い。く。れ。ぬ。汝。が。厚。に。公。を。納。れ。ぬ。の。違。う。ふ。万。の。隔。言。あ。れ。も。用。ひ。と。  
我。盟。を。く。え。よ。て。し。夾。約。の。く。ん。を。疑。ふ。な。よ。と。脊。筋。と。控。お。海。と。く。は。押  
し。て。忽。然。な。れ。お。甘。辛。が。は。し。た。れ。と。死。と。う。め。な。が。く。恥。辱。を。お。う。入。ま。か。ま

一井八の...

...

と堅く拒言ひ燈火と先づて公の闇を照し。原の坐席へ著とや五更の比  
かりせば。玄蕃も厚く謝し飯籠をしぬ。

第三

山氏諫を嫌く梢を館に迎ふ

却く正氏も旧臣の諫をもとれ梢を館へ呼入る。表を脱ぐ錦繡の袖も  
又紅粉を粧ひ玉簪にかぶりなせ。天暗貴族の風俗備り。寵の厚れ母  
隨ひ巧言たりて君の公を悦びしむ。因る。是までの清心も似氣なく。嬉乱  
逆忙暮の酒池つくり。事お酔狂。耽て。国門へ深居公勢。再急り下の  
訟も聴と。玄蕃一個は政事を任せられ。家生兩ふれ。昆乱せり。か行跡  
亦て。如何かれ不慮のわだ。到り。旧臣等。大ひ不敬と。落氷。踏の公  
地。て度。と。露。と。背。ひ。と。遠。避。ら。者。我。と。と。託。馬  
郡司兵衛俊國。對面を。と。も。連。ぎ。れ。を。知。深。圍。へ。踏。込。不。真。也。へ

けれと些も怯とびりる。君和漢の書に。且政教を。次ひく。如く。かれは。臣等  
復民を導く。事緒を引。と。爰。お。わ。り。て。萬。民。安。樂。と。な。と。て。公。居。常。に  
智。り。大。酒。酒。色。欲。み。淫。淫。を。好。め。れ。者。か。か。し。く。不。義。の。悪。名。を。受。ま。家  
滅。と。れ。事。古。今。例。ま。し。這。全。く。君。の。意。み。の。は。悪。人。従。ひ。遊。ぶ。則。日。一。邪  
情。を。と。め。れ。梢。を。先。避。め。し。と。は。く。と。凍。め。れ。と。山。氏。耳。ふ。の。と。も。  
戲。ま。し。れ。人。命。幾。何。も。酒。を。飲。み。人。を。遊。び。て。歡。び。樂。と。と。一。生。を。朝  
露。の。ひ。と。く。死。去。の。日。知。り。が。し。是。を。と。め。ぬ。數。と。公。忘。ま。べ。れ。酒。公。を。養。ふ。め。も  
美人。なり。斯。大。平。れ。樂。と。に。樂。し。は。と。ん。ば。い。つ。の。世。ふ。た。の。は。ん。や。と。空。言。め。半  
と。梢。に。醉。臥。ぬ。俊。國。も。唯。嘸。と。回。答。も。せ。と。諸。人。の。困。窮。愁。眉。を。顧  
と。非。義。毎。道。か。は。し。め。も。何。だ。て。と。良。斗。河。ん。と。は。噤。と。引。退。し。  
正。殿。へ。婢。淺。香。を。伏。し。招。と。汝。が。高。堂。外。記。无。清。門。政。景。心。根。を。碎。と。の。

誅切つるも我と俱に空しく汝をして携に附おしむ父へ告ぎたるや  
 死するもやと携が動靜細事に伺ふに似せしむるもやう君が榮  
 志の何の奸計といふやとまごまご母が如きの尋ねあがり外へ  
 出でたも形をとりつれば後國眉が皺め考時たりしぬ這と携と  
 正氏が膝に放し涙と俱に言々我の心身百辟と生と死の僅か  
 まてに毒と俱に酒宴とはあつた何の物なり氣に凍りつた  
 思ふは臣下かくありけりおのぞ悪むべしおのぞ二つは睦月の方  
 かさへすけりよ金圍の契ても流く泪の満く標の心身なる事  
 と恨の如きふとひまらめ今寵のほりしも眼前衰ふるの悲し  
 とはのりとのりしと汝もあはれと潜然とうち歎たるときに死  
 むるもかく辱めけりけりんもの汝と泣く出行去るを柳笛ん  
 せき強然と醉れあつておし権ありて眼とえ用と刃が眇昧妻の  
 はやよ携とつぐ地へ遺りぞりよと責められも傍にあれど  
 ざればいづくも回答せざりしが逆しはふ眼と瞋らし罪なき  
 として光景を怪崇のつごにもありけりおのぞ人々怖と  
 左衛門政景正氏の側へ墮と墜し白刃より鮮血懐紙りて押  
 實意が清し。國家身せん時必煩祥あり。忘んふかうに妖  
 得伶俐發明おのしるが賢と侮り理と経し。智の非と飾り  
 防は自棄自慕君の者がたれやうに行跡つひ母のうたれ  
 こころを棄れ一個の佳人の為多くの家生を癡あかす何  
 携を退けむのよかろふ力添はるの育と國家を轉せん  
 五風が凍と納むる神主の孝昆裔への惠は是れ

せき強然と醉れあつておし権ありて眼とえ用と刃が眇昧妻の  
 はやよ携とつぐ地へ遺りぞりよと責められも傍にあれど  
 ざればいづくも回答せざりしが逆しはふ眼と瞋らし罪なき  
 として光景を怪崇のつごにもありけりおのぞ人々怖と  
 左衛門政景正氏の側へ墮と墜し白刃より鮮血懐紙りて押  
 實意が清し。國家身せん時必煩祥あり。忘んふかうに妖  
 得伶俐發明おのしるが賢と侮り理と経し。智の非と飾り  
 防は自棄自慕君の者がたれやうに行跡つひ母のうたれ  
 こころを棄れ一個の佳人の為多くの家生を癡あかす何  
 携を退けむのよかろふ力添はるの育と國家を轉せん  
 五風が凍と納むる神主の孝昆裔への惠は是れ

親小取付其忠公のふしね正氏黙念とあしけれ所へ玄蕃揃て  
 其れを正氏見んと面々移りけ始の光景其似もつうて微と笑ひ揃て眼中  
 に涙をうかぬ御強親が其立芳容皆悉梨花の雨次第と其はふ意中  
 属し人も愛慕の情おこり何の由とゆふをきくて哀れ俱に聴ぬ揃を  
 外記左衛門が乃母避るれんりや悟り一の奸計をうさんと心母おふ付一陣の  
 暮風吹おこり教の燈火一度消々其小揃の声してこや誰かつとを妾  
 かきとらへ放されぬ汚しれりすと叫びぬ正氏誰か其燈火つ  
 よと焦燥を其を近臣我もくと忽えの如く照渡らせたり揃正氏傍へ  
 戦栗怯みは小そがりやや何者が懸想うとそ不敵なれ明らか供  
 出惹き入て面縛せんと揃と連お責われが君の寵を其の厚れと失ひ  
 不義小陥入罪の嘆しく。こころが裏なれをえせしとせんと這遍馬を取

おとたりと。金雞の紋れ小柄はし出しけは正氏もふらりあづこれ  
 先の年外記左衛門へあえし小柄なり。はづらさくも形と不義の罪外記  
 左衛門あり。誰り退け獄舎へ入とよと。隄調母家生も外記左衛門  
 たり巻を左右お拂ひ去もくもひがしとて帯を短刀とる小柄  
 へんご。叔とつらうなれをさしあさり言然れ筋もはまじらう形とて  
 ころお納め伴のれ行りね正氏暗ぐとなり面々移り揃おりれと  
 かきして情好えれ小我を捨。いづ地へう走らんとすれぞ恨となれや。せ  
 けははその厚れはさう海次知り。厚く報いんとされを睦月の方諸臣が  
 其と誦す。遠めを非命に死んもいとせれども妾がけと添まじりせり  
 君の心とあふれ。かきと聞えんと。便れをたもなき。せは素性  
 死くる結押す。こころが裏なれ。此のうらも君のほと海を。

あひれもみる妻が罪なりと正氏が藤へもつれられどまきまがごか  
ひとしく。むらび酒宴を催しければとぞ。

山研 大夫 宗 礼 物 証 卷 之

藥方根元 奥州岩城 藥王丸

價 壹包百銅 半包四十八銅

○男女も年次も接ぬるもい葉を用ゆれを治さるるのめたる○後の  
いふと後救ふべきやいふに治さるる種のじ○たんすういんさく  
公下は之時とたう痛食もまざる用いてまよす○乳を介ておよ  
るに精進するに用ひる乳をいしくとめ○頭痛おまひまやると人べき  
○宿癖を用いては○右外之にきこふ本帳中にいふはしとていふ

本家調合所 大坂志人志人志人 河内屋重太郎

賣 弘 所 系三系とつり 大文字屋得五郎

目



